

# The Report on Survey of Tanoie Kiln Site in Fukue Island in the Goto Islands

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/47111">http://hdl.handle.net/2297/47111</a>

## 五島列島福江島の田ノ江窯跡に関する測量調査ノート

野上 建紀

(長崎大学多文化社会学部)

はじめに

I 五島焼に関する先行研究

1 文献史料に見る五島焼

2 考古資料に見る五島焼

II 田ノ江窯跡の測量調査

おわりに - 今後の課題について -

はじめに

五島列島は、東シナ海に浮かぶ島々であり、長崎県本土との間には五島灘が広がっている(図1)。古来より大陸との交易、交渉の上で重要な位置にあり、交通の要衝として役割を果たして来た。

福江島は、五島列島を構成する島々の一つであり、北東から南西の方向に配置された列島の南西部に位置し、その列島の中では最も大きな島である(図1)。陸地は山林が多く、平野に乏しい。海岸線はリアス式海岸で入り組んでいる。

藩政期の福江島は、五島列島を支配した五島氏による福江藩によって治められた。福江藩の初代藩主は五島玄雅であり、11代藩主の盛徳の時に明治維新を迎えるが、寛文元年(1661)4代盛勝の時に分知して富江領(藩)が成立している。富江領の初代当主は福江藩の3代藩主の弟盛清であった。8代当主の盛明の時に福江藩に併合されたが、その際には武装蜂起による抵抗が見られた。いわゆる富江騒動である。

そして、この福江島で生産された焼き物を五島焼とよんでいるが、これまで考古学的な調査はほとんど行われていない。地表に明確な遺構を残す一部の窯を除いて、窯跡の正確な位置も明らかではない。福江藩領、富江領のいずれの領内にも窯跡が残るが、今回、測量調査を行ったのは、富江領に位置する田ノ江窯である。富江窯、皿山窯などもよばれているが、富江領内には田ノ江窯の他に八本木窯(繁敷窯)があるため、本報告では田ノ江窯とよぶことにする。

以下、五島焼に関する先行研究を振り返った上で、

今回の測量調査の成果を紹介したいと思う。

I 五島焼に関する先行研究

1 文献史料に見る五島焼

豊臣秀吉による朝鮮出兵に参加した五島純玄・玄雅が朝鮮人陶工を連れ帰ったことに始まるといわれているが、それを裏付ける資料はもちろんそうした史実をうかがわせるものもない。下川達彌は五島藩における陶磁器生産の開始について、肥前陶磁の生産開始から150年から200年ほど遅れて始まっているとし、その理由として大陸に非常に近い位置にあるために、大陸系の陶磁器の入手が容易であったことや朝鮮に出陣した五島藩主純玄が文禄3年(1594)に朝鮮の陣中で亡くなったために陶工を連れて帰るような状況になかった可能性をあげている(下川2001:44)。

五島焼に関する文献史料は多くない。主として、中島功が著した『五島編年史』(国書刊行会1973)に断片的な記載が見られる他、天草の『上田家文書』など他地域の資料が確認されているくらいである。

以下、『五島編年史』の記載を中心に年代順に紹介しようと思う。

1) 原料の販売に関すること

五島藩と窯業との関わりを示す最も古い史料は、陶土など原料に関するものである(史料1)。『五島編年史』(国書刊行会1973)の中の天和2年(1682)の「御掟書」の記載である。勝手に他領へ売りさばくことを禁止した特産品の中に「焼物土石」や「薬石」が含まれている。「石」とあるため、磁器原料を含むものとみてよいであろう。

(史料1)

「四月、福江方ニ於テ法度三十七ヶ条ヲ申渡サル(中略)

一 他所に出すことを禁ぜられたるもの

(中略)

## 一 同

楊梅の皮、焼物土石並葉石、ゆずぢう、たぶの木の皮、しいの木の皮、しきみの木の皮  
右之品々他領江出す間敷由、御定書の諸色の外、此以前、雖被仰付候密々出之由に候、向後弥以、右之品々他所江不出之様に、掛中船見共に、急度可被申付之、若相背キ出之もの於有之は、後日に聞之といふとも、其者は不及申、船見のもの迄も、科銀可申付者也（「御掟書」）

## 2) 小田窯の開窯と操業に関すること

五島焼の窯業の始まりについて、『五島編年史』の明和4年(1767)の項に記載が見られる(史料2)。大村領より陶工が来て窯業が始まったとあるが、その年代について、明和4年(1767)とみてよいか、不明な部分もある。「然モ永続セズ」とも記されており、明和4年の時点で廃窯しているとすれば、開窯は明和4年以前となる。

また、「大村領の陶師」については、どこの窯場の陶工であるか不明であるが、波佐見や長与などの陶工であった可能性が高い。大村領の陶工が他地域に招聘された例を挙げると、宝暦12年(1762)には天草高浜焼が長与山の陶工が招かれて開窯しており、安永4年(1775)には長与の陶工安右衛門・さと・市次・政治・安平の5名が四国砥部に招聘されている。18世紀後半に長与の陶工が各地に招かれていることがわかる。高浜や砥部はいずれも五島と同様に磁器原料産地を有しており、地元の資源を生かすために積極的に技術導入を図ったものと推測される。

## (史料2)

「大村領ヨリ陶師来り、福江小田ニテ焼物始マル、然モ永続セズ」(『鵜山君御直筆御日記』)

## 3) 富江領内の窯場に関すること

小田窯は、福江領内の窯であったが、富江領内の田ノ江(田野江、富江)の皿山については、文化2年(1805)に五島藩富江領の6代当主の五島伊賀守運龍が、天草の高浜村庄屋第7代宣珍の弟上田定胤を招聘して焼かせている(下川2001:45)。中小姓格三人扶持を与えて開かせている(下川2001:45)。文化9年(1812)に一時中断し、文化12年(1815)には定胤も天草に帰っ

ているが、その後に再興され、幕末頃まで操業された可能性が高いという(下川2001:45)。

富江の窯の経営の厳しさを物語る記載が『五島編年史』の天保5年(1834)の項に見られる(史料3)。引用は『宝暦八年御日記』とあるが、『天保五年公私田行雑録』の誤りであろうか。

## (史料3)

「富江皿山、年々十貫匁位ノ損失ノ趣、是ハ先ヅ治左衛門ニテ受持罷在候由」

そして、中島は「富江ノ皿山」について、「富江五島家ノ経営ニシテ皿山奉行ヲ置キ瑞雲寺前ノ貞方氏ヲ以テ之ニ当ラシム」と記すが、一方で「関係記録類未ダ所見ナク、経営ノ法ソノ他悉ク不明ナリ」と記している(中島1973:881)。また、玉之浦町大宝寺蔵の「天保5年(1834)銘の線香立てや富江町瑞雲寺蔵の「奉寄進、陶山中、嘉永2年(1849)西六月」銘の徳利の存在を紹介している(中島1973:882)。

原料については、今は俗に茶碗粉山とよんでいる田尾山から掘り出しており、その収益は藩校「成章館」の運営費に充てられていたとされている(中島1973:882)。

陶工や関係者については、窯跡付近の宝生院が所蔵する「田ノ江村徳松」銘の大皿がある(中島1973:882)。過去帳によれば、徳松(文久2年6月4日歿)は清作(嘉永4年7月17日歿)の子であり、清作は四国讃岐より来たと伝えられ、相良姓であるという(中島1973:882)。徳松の子孫の房吉(明治10年12月26日歿)の子猛が窯跡の土地所有者であったという(中島1973:882)。徳松らが富江皿山に何らかの形で関わっていたことはわかるが、その具体的な関わり方については不明である。

同じ富江領内には、田ノ江窯の他に八本木窯跡(繁敷)がある。天草の上田家には、『八本木皿山絵図』が残る。八本木山の東側の麓に登り窯の他、「スヤキ」の窯、「役所」などが見られる。登り窯の上方には「窯神」も認められる。さらに「皿石在り」の表記もあり、磁器原料の採掘地あるいは集積場であるかもしれない。また、川沿いにいくつかの小屋が描かれており、水碓小屋の位置を示している可能性がある。地図は「文化七年記 五島富江 八本木 繁敷」の文字が透けて見

えており、1810年頃に描かれたものであろうか。

また、田中栄次氏のご教示によると、『五嶋富江繁敷村』の中に「五嶋富江陶山休方並福蔵中岳江引越ニ付諸事取計一件手口日記 上田禮作 上田五太夫」という史料の書き下し文がある(史料4)。文化9年(1812)に小窯4室の陶磁器の運上銀等に関する記録が記されている。

#### (史料4)

「文化九申七月廿九日小窯四軒取切焼、八月四日口明ニ付山口氏へ相達候処、銀兵衛弥惣次被差向、陶器不残御上江御引取之旨被仰付、相改、右兩人ニ相渡候、然処荷造口相濟候上跡口度御運上銀六拾三匁、右四軒之御運上銀共二百六匁、外ニ茂市銀左衛門兩人之納銀四十目、百四拾六匁分之陶器御受取、相残四拾七匁七厘分松木代禮作村方へ頼伐セ候百廿七分(匁か)五分壺(後略)」

#### 4) 他地域の陶工や商人に関すること

『五嶋編年史』の文化6年(1809)の項に2名の大村の陶工が五島に来ている記載がある(史料5)。技術支援に伴うものであろうか。また、天保年間には五島の釉石の研究を有田の久富与次兵衛が行っている。

#### (史料5)

「先達、大村ノ皿焼兩人罷下り、暫ク月川小所化方ニ罷下り居候者ノ旨申達ス、入船申付ク」(『御系譜御雑録下書巻一』)

#### 5) 陶石の採掘に関すること

最後に陶石の採掘に関する史料をあげておく(史料6)。明治3年(1870)に増田村の亀吉という者が、この山の陶石の採掘を願い出て、翌年に許可されたものである(下川2001:46)。しかし、問題があつて、結局、中止となったようである。

#### (史料6)

「一月、増田村亀吉ヨリ田尾ノ四石一陶石一掘取り方、五年間百両ニテ願出デ、許サレシガ悶着アリテ止ム(四年十二月付、福江県発魚目出張所宛文書『福江掛合往答一件』)」

## 2 考古資料に見る五島焼

五島焼に関する考古資料は、一部の窯跡を除いて、多くはない。『五嶋編年史』に記載されている五島焼の窯跡は、福江領内の小田(2カ所)、籠淵(2カ所)、山内、富江領内の田ノ江、繁敷である(中島1973:882)。一方、長崎県の遺跡地図に記載されている窯跡は、岐宿町の皿山窯跡(岐宿町中岳郷字中野)、通称壺焼窯跡(岐宿町戸岐首郷字地蔵口)、富江町の八本木窯跡(富江町繁敷郷字八本木)、皿山窯跡(富江町松尾郷皿山)である(図2)。岐宿町の皿山窯跡が籠淵、通称壺焼窯跡が山内、富江町の皿山窯跡が田ノ江、八本木窯跡が繁敷にそれぞれ対応する。小田については、『五嶋編年史』に「コノ皿山ハ今ナホ皿山ト云ヘリ、福江町大荒郷字小田池ノ南一五五八番地ハソノ址ナラン。ママ遺物ヲ発見スルコトヲ得。」とあるものの、長崎県の遺跡地図には記載されていない。いずれの窯跡も発掘調査は行われていない。これらの窯跡の中で遺構が確認できるのは、田ノ江(富江)窯、八本木(繁敷)窯の2カ所のみである(下川2001:45)。窯(本焼きの登り窯)以外の生産に関する遺跡としては、原料採掘地、製土施設、細工場、素焼き窯など各生産工程に関わる施設の遺跡の存在が想定されるが、いずれも未発見である。

一方、消費に関する遺跡としては、おそらく福江島や周辺の島々の近世遺跡の調査を行えば、五島焼の製品が出土すると思われるが、現段階では五島焼を肥前陶磁の出土資料の中から確実に抽出することは難しい。その中で石田城の出土陶磁には五島焼と見られる磁器片を確認することができる。

以下、遺構が確認できる窯跡と石田城出土磁器について紹介する。

#### ①田ノ江窯跡(富江窯・皿山窯)

今回、測量調査を行った窯跡である(図10、11)。田野江の宝性院(図13)の裏手に位置している(図3~5)。林の中にトンバイ(耐火レンガ)で築かれた連房式階段状登窯の窯壁が良好な状態で遺存している。天井部が遺存していないが、いわゆる温座の巢もよく残っている。火除け(火立て)や十字ハマなども確認することができる。佐賀県立九州陶磁文化館の展示図録には焼成室数8室、焼成室平均横幅9.6m、窯の長さ63mに及ぶ大きな窯であると記されているが

(吉永 1988:132)、焼成室ではなく、現状の地形の段差の数と規模を計測したものと推測される。

富江歴史民俗資料館では、広東碗や端反碗などの染付製品の破片、ハマヤトチンなどの窯道具が展示されているが、2016年現在、展示ケースの中で八本木窯跡の採集遺物と混在した状態となっている。

### ②八本木窯跡(繁敷)

八本木窯については、前述したように天草の上田家に『八本木皿山絵図』が残り、往時の位置や配置については推定可能である。下川達彌が1997年に当時の富江町教育委員会の案内で現地を訪れている。現地では連房式登窯の最後の数室を遺構として残しており、トンバイや窯道具、染付磁器片などが採集される(下川 2001:46)。2008年に現地踏査を行った際にも山林の中の窯壁や広東碗などの磁器片を確認することができた。

富江歴史民俗資料館では、蛇の目凹形高台製品、見込み蛇の目釉剥ぎ製品、広東碗や端反碗などの染付製品などが展示されているが、富江窯の製品と混在した状態であることはすでに述べたとおりである。

### ③石田城

江戸末期の嘉永2年(1849)に築城に着工し、文久3年(1863)に完成した近世城郭である。城内にある五島高校の施設の建替等に伴う発掘調査が1995年から2000年にかけて、長崎県教育委員会によって行われている。有田焼、波佐見焼、現川焼などの肥前陶磁が多数出土している。それらの中から確実に五島焼を抽出することは難しいが、例えば見込みに「大」字を染付した製品などは、五島焼の製品にも見られ(中島 1973:口絵)、また胎土も有田や波佐見の製品とは異なっているため、五島焼とみてよいと思う。

今後は窯跡採集資料をもとに製品の特質を明らかにしながら、消費地の遺跡と比較して、五島焼の抽出を行い、その流通について明らかにする必要がある。

## II 田ノ江窯跡の測量調査

2016年8月21～24日にかけて、五島列島福江島富江町松尾に所在する田ノ江窯の測量調査を行った。調査参加者は、筆者の他、岡田淳希、神田希、金城康哉、瀬戸暁加、平川梨乃、福島雄平、本田涼香(以上、

長崎大学多文化社会学部学生)、Nguyen Thi Anh(ハノイ大学)である。レベル測量は、岡田、神田、金城、福島が行い(図14)、平板測量は中野雄二(波佐見町教育委員会学芸員)の指導の下、瀬戸、平川、本田、アイン、神田が行った(図15)。

そして、中野雄二の他、佐々木達夫(金沢大学名誉教授)・渡辺芳郎(鹿児島大学法文学部教授)・松下久子(長崎県文化観光国際部文化振興課学芸員)より現地指導を受けた。また、五島市富江支所の小田昌広課長をはじめとした地元の方々、窯跡の土地所有者である相良俊則氏、貞方義男氏、貞方清子氏のご協力を頂いた。

8月21日に五島市のシルバー人材センターに委託して、窯跡の範囲の草刈りを行った。そして、22日から23日にかけて、窯体全体のスケッチを約1/100の縮尺で行い、遺存状態のよい焼成室について、平板測量による平面図(1/30)とエレベーション図(1/20)を作成した(図6)。なお、標高は窯跡下方の道路脇の基準点(海拔3.4m)を基準とした。さらに23日には富江歴史民俗資料館に所蔵されている田ノ江窯跡および八本木窯跡の採集遺物の写真撮影と実測を行った(図24)。

窯跡は、海岸線の道路から150mほど内陸に入った宝性院の裏手の山林の中にある。窯体があった場所は平坦地が段々となって連なっている。窯体の左側にある一人一人が通れるぐらいの幅の小径に沿って登ると、地表に露出している数室の焼成室を見ることができる(図18～22)。

今回の測量調査について、確認できたことを簡単に述べる。窯の全長は推定55～60mである。標高15mから30mにかけて位置しており、比高差は約15mである。焼成室の数はおよそ15室前後ではないかと推定される。最上室と思われる焼成室は確認できたが、胴木間は未確認である。そのため、本文では、最上室を第1室とし、上から2室目を第2室、3室目を第3室(以下、同じ)と便宜的に表記することにする。将来、胴木間が確認された場合は、改めて焼成室の名称を考えることにする。

焼成室の横幅は確認された第1室で約6.6mであり(図7)、第4室の奥壁が幅6.6m遺存している(図8)。焼成室の奥行は第3室で内寸3.75mである。奥壁の厚さを加えると4m前後となる。第1室の奥壁から第5

室奥壁までの距離は、16.6m であり、1 室あたりの奥行の平均は 4.1～4.2m となる。

第 4 室と第 5 室（図 9）の間の温座ノ巢では、27 個の通炎孔が確認されている。通炎孔の大きさは幅 13～14cm、高さ 24～27cm である。第 1 室の奥壁の温座ノ巢の左端（尾根側）では、トンバイの代わりに、ヌケが分炎柱として用いられている。

第 1 室の背後が窯尻と推定されるが、第 1 室の奥壁は、数枚の壁が重ねられている。煙出しの構造であるのか、窯の修復であるのか、明確ではない。第 1 室の背後は後世に埋められており、造成されたと見られる平坦地が広がっている。

今回は、物原の調査は行わなかったが、第 5 室の奥壁に接続する第 4 室の側壁（図 17）が尾根側で確認されたので、出入口、木口は谷側にあったと推定され、物原もまた谷側にあったとみられる（図 23）。ただし、窯体の谷側は地形改変が著しく、明確な物原堆積層は認められない。

築窯にあたっては、大規模な造成が行われたようである。窯は等高線に斜めに交わる形で築かれているが、その際に尾根の北側の斜面を削りながら、埋土を行い、平坦地を確保している。また、窯尻と推定される第 1 室の背後も大きく掘削造成が行われている。

物原は未調査であるため、生産した製品の全体像は不明であるが、製品は、染付が主体である。器種は、碗、皿が多い。碗は広東碗、二重網目文丸碗、端反碗などがあり、皿は蛇の目凹形高台のものが主である。皿の中には内面に足付きハマ痕が見られるものや高台に円形ハマが熔着しているものもある。窯道具は、磁土製円形ハマ、陶土製円形ハマ、足付きハマ、トチン、十字ハマ、チャツ、ヌケなどがある。ボシは確認されていない。

以上、確認された窯構造や規模、そして、製品や窯道具は、文化 2 年（1805）に陶工を招いて開窯したとする史料の記載に矛盾するものではない。

## おわりに

五島焼に関しては不明な点が多い。今回、初めて窯跡の測量調査を行ったが、考古学的な調査はこれまでほとんど行われていない。そのため、多くのことが研究課題として残っている。以下、それらを述べていこうと思う。

まず陶磁器生産およびその周辺に関する史料の整理が必要であろう。文献史料の多くが散逸してしまっている状態であり、新史料の発見は難しいかもしれないが、陶磁器以外の内容も含めて、整理しておく必要がある。さらに五島以外の地域の史料、例えば大村藩の史料や天草の上田家文書などの史料の整理も必要である。

また、文献史料の記載と現地との照らし合わせも必要である。福江島で最初に陶磁器生産が始まったとされる小田窯の位置を特定することや、『八本木皿山絵図』に描かれている施設の位置を同定することで、当時の生産空間の復元が可能となる。

そして、考古学的にはまず各窯跡の位置、年代、遺存状況、そして、それらの技術系譜や影響関係を知ること、続いて福江領と富江領の窯跡の比較によるそれぞれの特質の把握と技術的影響、さらには五島焼と肥前の他産地との関係を調べなければならない。

その上で五島焼の製品の特質を明らかにすることが重要である。例えば見込みに染付けされた「大」字の意味を探ることや胎土分析を含めた原料の性質を知ることなどである。五島観光歴史資料館に五島焼として展示されているものの中には、佐賀県嬉野市で焼かれた志田焼と見られる製品が含まれており、地元では志田焼が五島焼と誤認されている可能性がある。かつて志田焼が江波焼と誤認されていたことと似ている。今後の窯跡の物原の調査によって、それぞれの窯の製品を明らかにすることが重要である。

そして、消費地遺跡における出土状況から五島焼の流通を知ること大きな課題である。五島灘をはさんだ九州本土には陶磁器の大生産地があり、九州本土方面に五島焼が流通したとは考えにくい。おそらく五島列島内での流通が主であると思う。島内でどのような流通が行われていたか、島という海に囲まれた空間であるがために、比較的、焼き物のライフヒストリーをモデル化しやすいのではないと思う。

磁器の大生産地である有田、波佐見など肥前本土に近く、磁器の入手が比較的容易と思われる地域で、他藩から陶工を招いて窯業を興した経緯はどのようなものであったのであろうか。殖産興業としての窯業の位置付け、磁器使用の普及などの社会状況などに関わりをもつものと思われる。なぜ島で陶磁器が焼かれたか、という問いの答えを出すことが今後の大きな課題とな

ろう。

なお、本研究は、平成 28 年度（2016）西田記念東洋陶磁史研究基金の研究助成を受けて行った。

今回の測量調査にあたっては、多くの方々のご協力とご指導を賜った。

相良俊則、貞方義男、貞方清子、小田昌広、中村秀記、五島市富江支所、五島歴史観光資料館（敬称略）

#### 参考文献

- 下川達彌 2001 『土と炎の里 長崎のやきもの』昭和堂  
中島 功 1973 『五島編年史』国書刊行会  
吉永陽三 1988 『長崎の陶磁』佐賀県立九州陶磁文化館  
富江町郷土誌編纂委員会 2004 『富江郷土誌』富江町教育委員会

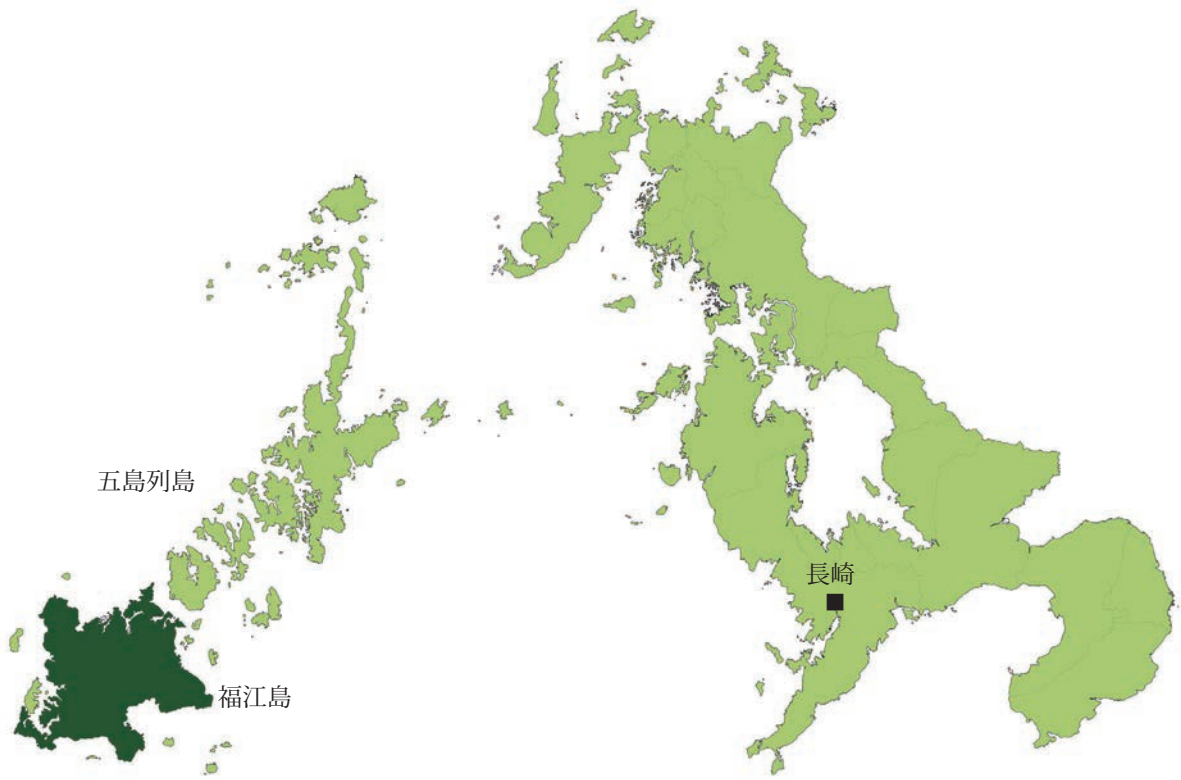


图1 福江島位置図

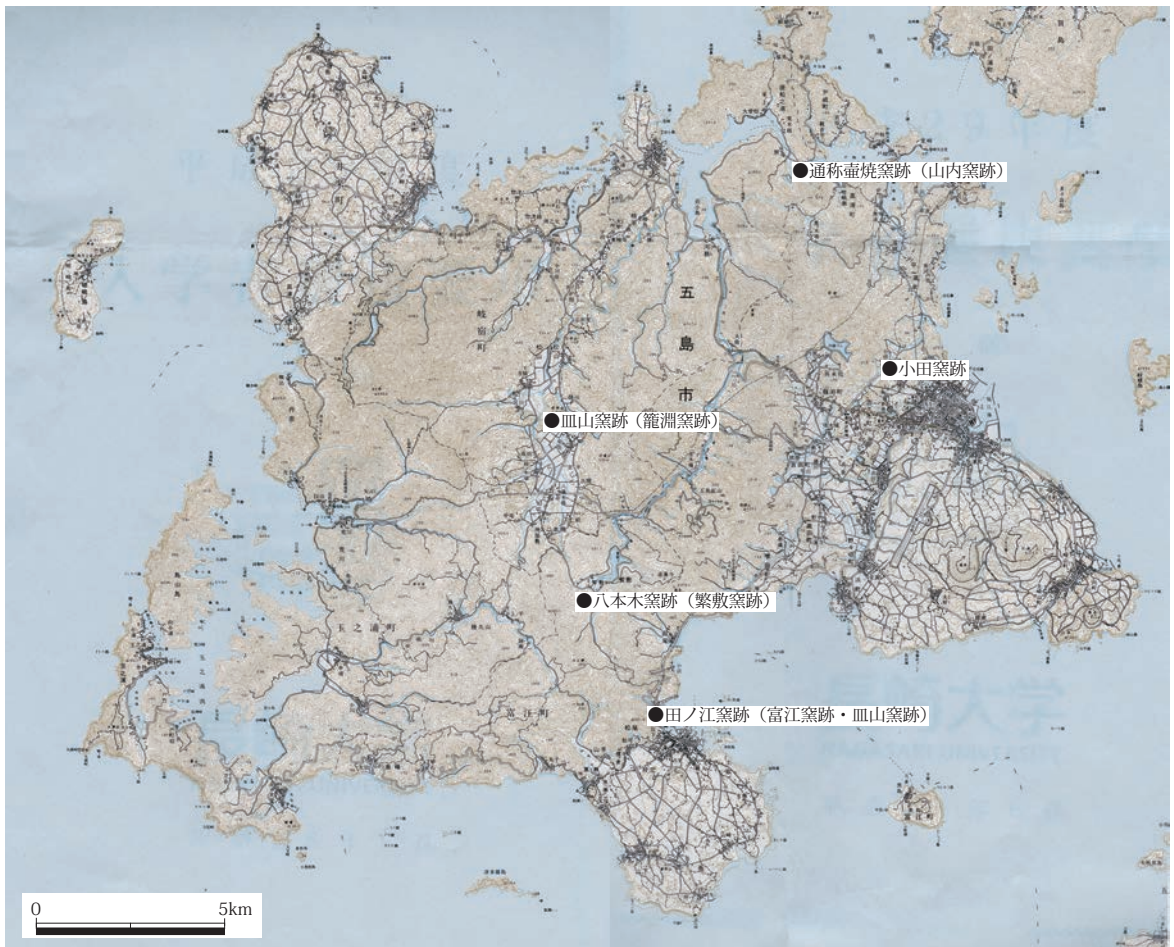


图2 福江島古窯跡分布図



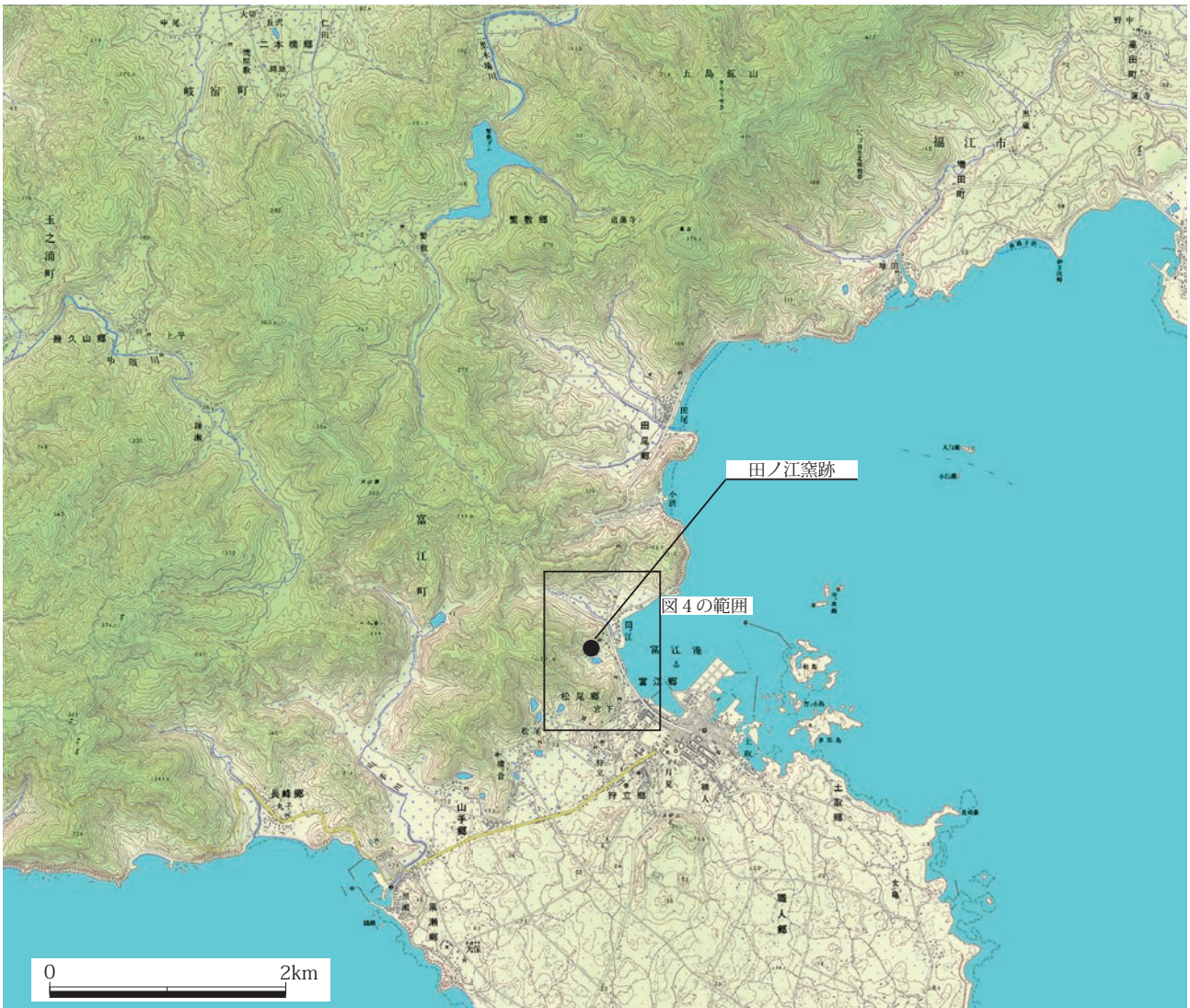


図3 田ノ江窯跡位置図



図4 田ノ江窯跡周辺図

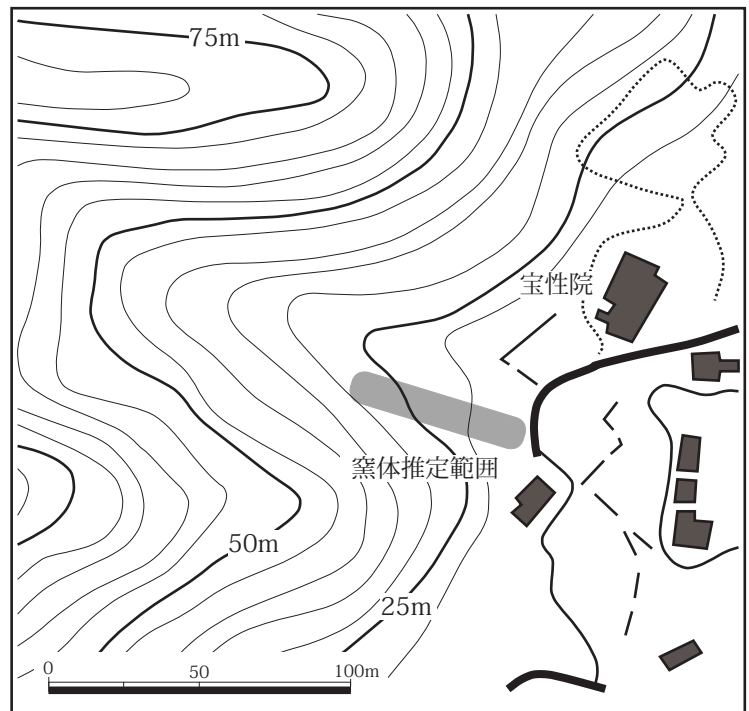


図5 田ノ江窯跡窯体推定範囲

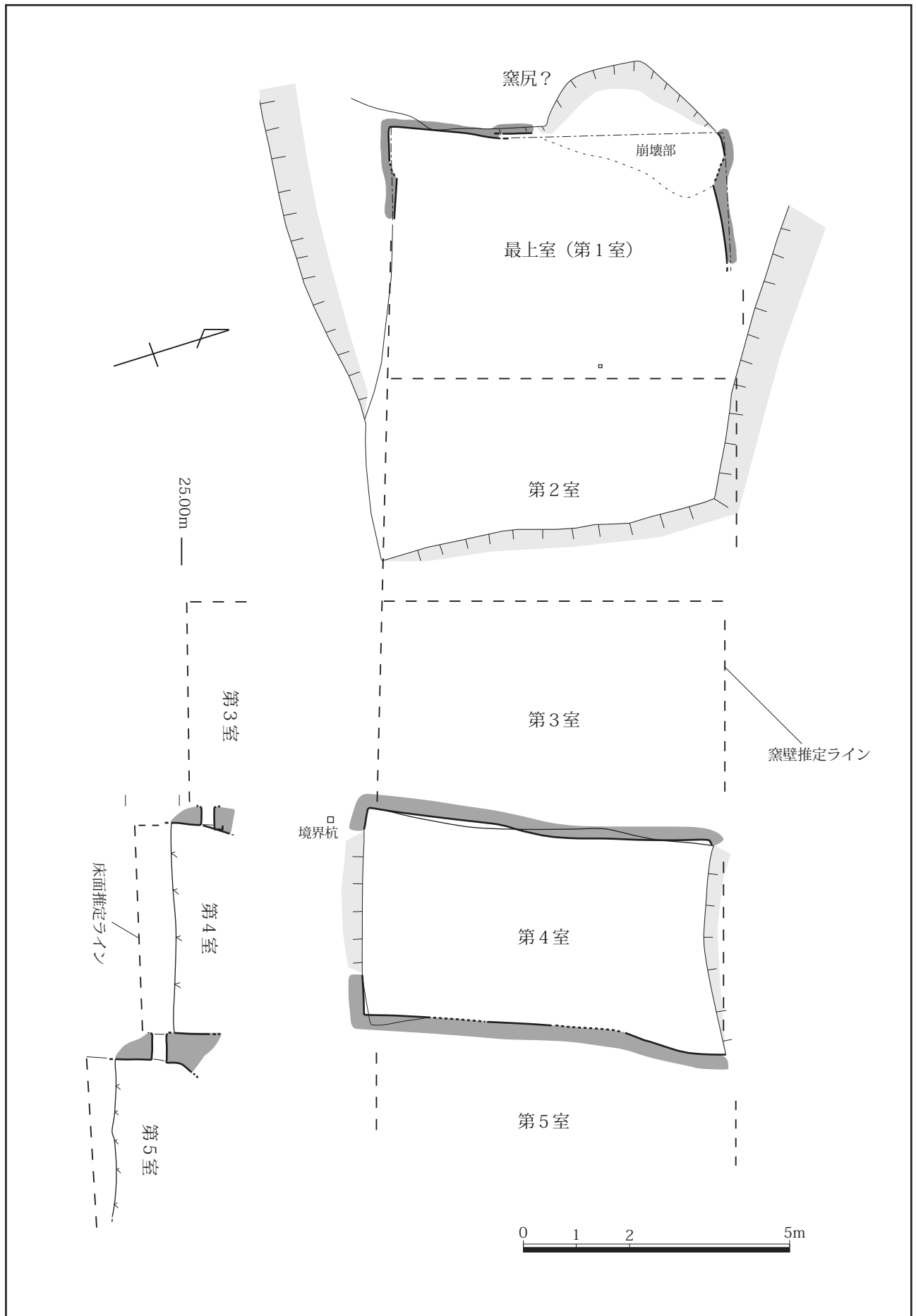


図6 田ノ江窯跡上部平面図・縦断図



图7 田ノ江窯跡第1室（最上室）奥壁遺存状況



图8 田ノ江窯跡第4室奥壁遺存状況



图9 田ノ江窯跡第5室奥壁遺存状況



図 10 田ノ江窯跡遠望（写真中央の墓地の左側）



図 11 田ノ江窯跡遠景（写真中央左手）



図 12 田ノ江窯跡近景（東から）



図 13 宝性院（東から）



図 14 田ノ江窯跡測量風景（レベル測量）



図 15 田ノ江窯跡測量風景（平板測量）



図 16 田ノ江窯跡窯壁（胴木間付近）



図 17 田ノ江窯跡窯壁（第4室南隅部）



図 18 田ノ江窯跡窯壁（第4室東側）



図 19 田ノ江窯跡第4室奥壁及び西側隅部



図 20 田ノ江窯跡第3室奥壁及び西側隅部



図 21 田ノ江窯跡第1室奥壁及び西側隅部



図 22 田ノ江窯跡第1室西側隅部



図 23 田ノ江窯跡物原推定箇所（南から）



図 24 田ノ江窯跡等出土遺物実測風景



図 25 田ノ江窯跡調査参加者